

Historian's View

NO. 37(最終号)

□ワイズのメディアあれこれ

- 今あるワイズのメディア
- ワイズメンズワールドは1936年に始まった
- そのまま年表になる現在の「理事通信」
- ブリテンを読むのは会員の義務
- オレ流、ワイズメディア論
- なぜ、ヒストリアンズ・ビューか

2011年5月29日 東日本区1998~2011 ヒストリアン 吉田 明弘

今あるワイズのメディア

現在、東日本区でお目にかかれるワイズのメディアは、次のとおりです。これに、各レベルにおけるメンバーのロコミを加えるべきでしょう。発信する側も受ける側も、それぞれの特性を理解して、メディアミックスをすると、相乗効果が出ると思います。

国際レベル

ワイズメンズワールド (Y's Men's World) : 年4回発行される国際協会の機関誌。英語版は、区役員に、日本語版は、区役員、クラブ会長に配布されている。国際協会ウェブサイトでは英語版、東日本区ウェブサイトでは日本語版が読める。

ファミリーレター : 藤井寛敏国際会長が始めた、いわば「国際会長通信」。eメールで毎月発信されている。東日本区ウェブサイトではバックナンバーを見ることが出来る。

ユースワールド (Youth World) : ユースインターンが中心となって発刊するインターネットによる季刊誌。国際協会ウェブサイトでは読むことが出来る。1989年に第1号が出され、ユースの関心や活動の傾向を知ることが出来る。

国際協会ウェブサイト : 資料的にも充実している。

アジア地域レベル

アジアブリテン(ASIAN Y'S MEN) : アジア地域の機関誌。アジア地域の各区の状況を知ることが出来る。内容は、年度の地域会長の意向に左右されがち。

アジア地域ウェブサイト : 人を得ないと更新がされない年度もある。

東日本区レベル

東日本区報 : 年3回発行される区の機関誌。理事事務局が編集して、クラブ会長を通じて全会員へ配布される。

理事通信 : 理事からクラブへ向けて毎月発行される短信。メンバーはクラブからの配布、ワイズドットコムでの配信によって読むことができる。バックナンバーは東日本区ウェブサイトには収容されている。

ワイズメネット報 (Notes & News) : メネットの区レベルのブリテン。区報と合わせて年3回発行、配布される。国際や区のメネット事業、部やクラブにおける活動が掲載される。

事業主任通信 : 各事業主任から区役員、クラブ会長に配布される。最近、体裁が統一されている。バックナンバーは東日本区ウェブサイトには収容されている。

東日本区ウェブサイト : 区ITアドバイザーが管理・運営している。区レベルの様々な情報を、ここで得ることが出来る。

部レベル

部報 : 部書記等が編集。年2、3回の発行。内容は、抱負・計画・報告が中心。

部長通信 : 内容、発行頻度は、部、部長によって異なる。

部ウェブサイト：現在、北海道部、北東部、関東東部、東新部、あずさ部がウェブサイトを運営している。区のウェブサイトからリンクが貼られている。

クラブレベル

クラブブリテン：ほとんどのクラブが毎月発行している。郵送、e-メール発信、ウェブサイト公開、それらの併用で、区・部役員、他クラブ会長にも送られる。

会長通信：例会の報告を短縮するため、あるいは、ブリテン発行の狭間を埋めるために、メンバーに配布しているクラブがある。

クラブウェブサイト：現在、23 クラブが区のウェブサイトからリンクされている。

ワイズメンズワールドは、1936年に始まった

『ワイズメンズワールド』（以下 YMW）は、1936年に、先駆的なものが創刊されましたが、1年で挫折、1937年に改めて正式にスタートしました。この時、本格的な編集者が現れるまで担当すると、引き受けたデビッド・R・エルダー（David R. Elder・米国）が1963年までの実に26年間、務めることになりました。

日本では、1950年12月号以降のものが保管されています。

現在、編集は、国際本部から完全に独立して行われています。国際本部は編集にタッチしないで、編集長の依頼によって原稿を執筆します。年3、4回発行して、英語・デンマーク語・スペイン語・ポルトガル語・中国語・ロシア語版は、インドで印刷され、日本語・韓国語版はそれぞれ自国で印刷し、会員1人あたり約1スイスフランの補助を受けています。

ワイズメンズワールド日本語訳

YMWの日本語版の制作が日本区文献委員会によって始まり、1983年9月に第1号が発行されました。それまでは英語版とデンマーク語版で

したが、この時に、日本語・スペイン語版が加わりました。

当初は、日本のワイズメンに興味をもたれそうだと判断した記事だけを意識して、A4版4頁にまとめていましたが、その後、ほとんど全てを訳すようになりました。東・西日本区に分かれた後は、それぞれ委員を出して、YMW日本語版作成委員会として作業しています。日本語版第1号からの委員である青木一芳さん（千葉）はじめ、長く務めている委員が多く、その努力によって、発行が続いています。

世界各地の多くのメンバーによる署名原稿で構成したもので、文章の進め方にそれぞれ個性や背景があって、理解しにくいこともあります。

しかし情報という面では日本では得られないものがあります。日本の区役員の中で、ちょっと目新しいことや変わった考えを書いたり、発言したりする人がいますが、ワイズメンズワールドの記事をヒントにしていることがあります。また、最近、日本でしきりに謳われているユースの参加促進などは、国際では、1990年代初めから、ユースを活動に参加させようという発言が目立っていました。国際の流れを読むことができます。

日本語版は、西日本区では会員全員に、東日本区では区役員とクラブ会長に配布し、メンバーは東日本区ウェブサイトで見ることができます。

国際会長のファミリーレター

これまでも、『IP News Letter』を毎月、発行した国際会長がいました。2010-2011年度国際会長の藤井寛敏さん（東京江東）は、『ファミリーレター』として、毎月発信しています。日本区時代の古き『理事通信』がヒントだったと言います。彼は、「国際会長だけではなく、チーム（地域会長、区理事、国際事業主任など）で書いてもらうように努めました。どんな顔をした人がどんなことをして、何を考えているのか。目的は、全世界の会員にタイムリーな情報を提供して、会員のすぐそばで活動していることを知ってもらい、国際

がひとつの家族であるという親近感と連帯感を持ってもらうことが、我々の組織の活性化の一助になればという思いからでした。非公式なものですから、多少のわがままは許してもらえと思っておりましたが、長くならないように、2頁建てだけは固守しました」と述べています。

アジア地域ブリテン

“地域”は、国際協会の運営組織を支える枠組みのひとつとして、所管の各区の働きを推進・増強するものです。独自に方針を打ち出したり、事業を興すものでもありません。しかし、年2回のブリテン発行と、区理事を通じての各クラブへの配布が課せられています。アジア地域の各区の実状は、ここで知ることが出来ます。

アジア地域ブリテン『ASIAN Y'S MEN』は、地域会長の考えで、身分不相応と思える重厚美麗になることもありました。1996-1967年度の奈良昭彦アジア地域会長（当時東京八王子）は、インターネットによるアジア地域ブリテンを提案しましたが、当時は、理解を得られませんでした。

代わりに奈良さんは、それまで更新されず、放置されていたアジア地域のウェブサイトの全面変更を自ら開発しました。英語、日本語、韓国語、中国語の4カ国語に対応するサイトの企画は、協力が得られず、日本語と英語のページの一部が完成したのみで任期を終えました。このサイトも長い間放置されていましたが、2007-2008年度の藤井寛敏アジア地域会長の時に、江口耕一郎さん（東京）が全面リニューアルをし、『ASIAN Y'S MEN』もウェブで配信されるようになりました。

「区報」と「理事通信」

『日本区報』と『理事通信』は、根は同じでした。『日本区報』第1号は、1947年9月に発行されたタイトルのないものだとされています。これは、太平洋戦争後、初めて日本区理事（第4代）に指名された、奈良傳さん（大阪）の、「拝啓」から始まる理事就任挨拶から書き出しています。

2号は『日本区報』となり、以後、『日本区報告』、『理事よりの通信』、『日本区理事通信』、『Letters from your Regional Director』と名が定まりませんでした。1950年2月の21号から『日本区報』が定着しました。

皮肉なことに、『理事通信』と混然としていた頃には、主語が区理事ではないかと思われる文もありましたが、知ってもらいたい、知らせたいという思いが出ていました。世間の印刷物が読みやすく、スマートになった1960年代には、お世辞にも良い体裁とは言えませんでした。情熱を感じました。それが、機関誌としての体裁が整い始めた頃から、諸報告が増え、誌面において魅力ある記事が埋没してしまいました。この傾向は、1980年代、1990年代になって、ますます顕著になりました。

東・西日本区に分かれ、当初は、ボリュームも減り、報道性、物語性のある内容が目立ちましたが、数年を経て、役員、委員会の定型的な報告類が増え、重厚長大なものになっています。

人間味のあった古き時代の「理事通信」

区報とは別に『理事通信』が発行されるようになったのがいつか、明らかではありません。区には、1967年12月に発行された坂村友三区理事（東京）のものから保存されています。現在の理事通信は、区報と同じように全メンバーを対象とした月刊『短信』（News in Brief）のような性格ですが、1980年ごろまでは、区役員、クラブ会長、担当主事を対象として、『RD メモ』ともいわれました。区理事が、いわば自分と同期の桜といえるクラブ会長宛てに送る、クラブ運営上の情報提供と激励、メンバーが知らないアンチョコのような意味もありました。ですから極めて親密、人間味が溢れるものでした。

たとえば、1977-1978年度の佐藤邦明さん（東京むかで）は、1頁目のアイキャッチャーに、全国各地のYMCA キャンプ場の施設を描いていました。タイトルにしても、1976-1977年度の津山

貞之さん(当時名古屋)は、「You coat RD Yo! (ゆうこと、あるでしょう)」でしたし、1981-1982年度の山田利三郎さん(東京西)は、『おじゃまんが山田くん』でした。これは、いしいひさいち作の当時の人気漫画が由来です。1970-1971年度の鳥居一良さん(名古屋)のものは、毎月A4で20頁にもなるもので、クラブのニュースから、個人消息、読み物、言葉遊びなどが満載されていました。

そのまま年表になる現在の理事通信

1980年代以降の『理事通信』は、内容的に行事予告、報告、依頼など、事務的連絡が増えました。執筆も、年度によっては、区理事に限らずに、区書記、事務局長、区事務所長などが担当しますから、個性はありませんが、全体的に網羅されて、「事務局通信」の感があります。見出しだけを整理するとそのまま年表が出来るほどです。

これは、1960年代中頃までは、区の行事といえば区大会、代議員会くらいしかありませんでしたし、区主導の事業も多くありませんでしたが、これらが増加し始めた1970年代には、区と各クラブの頻繁な連絡が必要となったため、時代の必然だったと言えます。

日本のメネット報は、1970年から

日本区メネット報は、筈川文子初代区メネット事業主任によって、1970年12月に発行された『Notes & News』が第1号でした。筈川さんは、「これからいよいよ誌上を通じて、皆さま方とお交わりを深めてまいりたいと、切に願っております」と述べています。国際メネット事業主任のメネットクラブのブリテン作成の勧めを掲載しました。以来、東・西日本区に引き継がれています。

東日本区ウェブサイト

東日本区のウェブサイトも、原型は奈良昭彦さんが作りました。以後、歴代ITアドバイザーに

引き継がれ内容の充実が図られています。このことは、『東日本区10年の歩み』に詳しく記されています。

面白い部長通信

部におけるメディアには、『部報』、『部長通信』がありますが、この内容、体裁、発行頻度は、部によっても、部長によっても違います。部報が年に3回くらい発行されるころ、部長通信が毎月発行されるケースもあります。

発行回数の少ない『部報』は、どうしても同じような内容になりがちですが、『部長通信』には面白いものがあります。部長も気心が知れて、クラブ事情を知った上で、思い切った発言をしますし、読者にとっても、登場人物が知っている人なので親しみがあります。親睦性、教育性としては、適度な媒体だと思います。

元気なクラブブリテン

日本のクラブブリテンでは、戦前のおお阪クラブのものが保存されています。形式的には、ほとんど現在と同じだということに驚かされます。パソコン、インターネット、印刷機器の発達、普及によって、紙面はカラーで美しくなり、写真が多くなり、しかも、発送費も含めて、安いコストで可能になってきています。

東日本区の中で、今、最も元気な媒体と言えます。

クラブブリテンについては、『ヒストリアンズ・ビュー』(以下HV)17号「ブリテンはクラブの窓」に詳述しましたので、省略します。

最近では会長通信、クラブマガジンが登場

会長通信を出すクラブ会長が増えてきています。これは、例会での報告時間を短縮するため、ブリテン発行の狭間の連絡事項を伝えるための理由でしょう。ほとんどが連絡事項ですから、ブリテン、メール、口頭連絡などのメディアをうまくミックスさせると、有効だと思います。

会長が入手した情報をすべて知らせることも大切ですが、自分のクラブ、メンバーにとって、何が糧になるかを判断して、軽重のメリハリをつけること、折角、定期的に発行されているブリテンを活かすことも会長の役目でしょう。また、会員の親睦を深める観点で、エッセーや読み物を中心とした「クラブマガジン」を発行してクラブブリテンを補完しているクラブも出てきました。

ヘンリー・グライムズの情熱

国際協会から、毎月、各クラブ会長に送られる『ワイズ・フーツ (Y'S Hoots)』という謄写印刷物がありました。国際書記長兼会計のヘンリー・グライムズ (Henry Grimes・米国) が編集する毎号 A4 版 10 頁にもおよぶクラブ会長指導書でした。彼は、1930 年にこれを始め、1962 年まで、32 年間、毎月発行して、世界のクラブに送り続けました。内容は、多岐にわたり、事務機器、通信手段が、手動のタイプライター、郵便、電報、電話しかない時代によくここまでと思わされます。これは米国のワイズメン全盛期を支えました。ポール・W・アレキサンダー名誉国際会長 (Paul William Alexander・米国) が、「彼は、人生をワイズに賭けた」と言い、1952 - 1954 年度区理事の尾形繁之さん (大阪) が「ポール (アレキサンダー) が種をまき、ヘンリーが育てた」と言ったのも、同時代に生きたワイズメンの実感だったのでしょう。

彼は、1962 年 12 月に死去しました。『ワイズ・フーツ』は、その後、2 カ月ごとの合併号となるなど年間発行回数を減らし、遂には発行を止めました。これもすべてが後任の書記長に問題があったわけではなく、アメリカ中心から世界のワイズへと動き出し、多方面への対応が求められた時代の変革、またクラブ側のニーズの変化などが大きく影響したと思われる。

この『Y's Hoots』を日本区では大阪サービス事務所で和訳しました。区役員とクラブ会長にのみ配布されましたが、ワイズメンズクラブが何な

のか分からない当時としては、貴重な教科書でした。

Y's Hoots については、『HV』19 号「文献と研修は車の両輪」にも記しています。

ブリテンを読むのは会員の義務

私は、ワイズメンは、区報とブリテンを読むことが、義務だと思っています。少なくともブリテンはそう思います。お互いに読んでいるという前提でワイズメンの会話が始まり、成り立っているからです。

例会前に、その月のブリテンを読んでおくことは、サラリーマンが出社前に、ざっとでも新聞に目を通し、ニュースを聴くのと同様です。もちろん、まれには、出来ない日があるでしょうが。

その義務を果たさせるためには、区報やブリテンを、読みやすく、読み甲斐があるものにする努力が必要です。

「区報」の変革の試み

1981 - 1982 年度、日本区書記として、私は、ささやかながら、区報の変革を試みました。山田利三郎区理事 (東京西) は、区報を区の全メンバーに郵送しました。区報を会長経由で配布すると、1 カ月経ってもメンバーに届かないことがあるからです。メンバーへの直送は、1973-1974 年度の奈良信区理事 (東京山手) も行いましたが、手間、経費から、その後は行われていません。

この年度、区報を 5 回発行しました。結果として紙面が変化しました。2 回が区役員の就任退任の挨拶と方針表明、決算報告に紙面を費やしても、3 回は、編集サイドで自由に使えて、企画物、読み物、ニュース、クラブの出来事などを載せることができました。

最終号は、区役員、区大会のホストクラブ、名古屋東海クラブの協力を得て年度内の 6 月末に発信しました。

年 5 回の発行となると、それこそ毎日、区報の編集に取り掛かっている状態でしたが、それでも、

タイムリーにニュースを届けるとい点では、満足できず、限界を感じました。

オレ流、ワイズメディア論

私は、『東日本区報』をよく読んでいます。区ヒストリアンであったこと、区役員会に出席していたことから、役員、委員とは親しく、どんな内容なのか、個人的な興味があったからです。

ワイズのすべてのメディアが、前向きであって、心弾ませるものであって欲しいと願っています。その中核となるのが、『区報』と『クラブブリテン』です。

だれしも、自分が見聞きしたことについて、他人がどう見たかを確認したいのです。

スポーツを観戦して、その経過と結果は、自分の目で観ているにもかかわらず、夜、スポーツニュースを観て、翌日、新聞で読むのです

ワイズの世界でも、今は、個人からさまざまな情報が活発に発信されています。初めて知ること、感動すること、あります。一方、そのことを当事者だけでなく、第三者はどう見ているのかを知りたいという気持ちがあります。そのニーズに応えられる、信頼できるメディアが『区報』だと思います。

しかし、『区報』は、ここ40年間、変化していません。他のメディアと比較して、速報性、発信頻度で、この任に耐えられません。『理事通信』が時代の流れに沿って変化したのですから、今度は『区報』の変革が必要でしょう。

一方、『クラブブリテン』にはブリテンエディターがいますが、『区報』には編集人がいません。

『区報』の主役は、区理事であり、区役員です。その活発な言動が報じられてこそ、活気が出るのです。第三者である編集人がいませんから、当事者自らが書くこととなります。当然、遠慮して十分には書けず、書けば、読む方に拒絶反応が出てしまいます。

かつては、客観的な報道などといわれましたが、

そんなことはあり得ないことが、分かって、一般紙の記事も署名入りになってきました。でも当事者ではない、第三者の視点は確保されています。

ワイズのメディアにおいてもこのことは必要であろうと思います。

もっと軽やかに、もっとわくわく、どきどきさせられる『区報』に変わり、ワイズダムを一層元気にさせることを願っています。

なぜ、「ヒストリアンズ・ビュー」か？

区報について、納得できない思いを持ち続けていました。区組織検討委員会で発言もしましたが、説得力を持ちませんでした。

昨年、そうか、自分でやればいいんだと気づきました。

実は、私はサラリーマン時代の最後に、広報部門を担当していました。若い人に任せると、私の仕事は、会議か、会社が事件にからんで、記者会見をする時に頭を下げる社長以下の人選と説得くらいでした。何かやってやろうと、社内のLANを利用して、『〇〇Today』という新聞を始めました。

社長発言、新製品、新工場の地鎮祭など、ニュースはいくらでもありました。その日の出来事をその日に流せますから、びっくりするほど反響がありました。社内で、全社員と直接コンタクトがとれるのは、自分だけだという自負と、ひとりで、社内世論を操作できてしまうという危なさを感じました。

これを、東日本区でもやってみようと、『ヒストリアンズ・ビュー』を、提案して、2009 - 2010年度の原俊彦区理事（東京サンライズ）、松田俊彦次期区理事（東京）の了解をとりました。

『HV』の利点は、次のとおりでした。①いつでも発信できる、②他の記事とバランスを考える必要がない、③原稿の長さを自在に調節することが出来る、④その日のことをその日に多くの人に発信が出来る、⑤制作、発信にかかる費用がほとんどない。

しかし、『区報』や『理事通信』とくらべると、①情報が質量ともに劣る、②記録性が弱い、などの弱点がありました。

次のように方針を決めました。

- ① 内容的に区の公式媒体との競合を避け、区報や理事通信に先走ることはやめる。
- ② 半官半民の立場を鮮明にするために、意識的に個人的なことを書くこと。
- ③ 存在を認められ、市民権を得るために、開始直後は集中的に発信すること。

いざやってみると、公式メディアとの競合を避けたため、ニュースというよりも、お説教ばい読み物になってしまいました。

あとがき

今号をもって『ヒストリアンズ・ビュー』を終わらせていただきます。辛抱強く読んでいただいたことに心から感謝いたします。

随分、偉そうなことを書きました。また、時には、おほめの言葉をいただき、嬉しく思いました。でも、どちらも、これ以上、続いては、自分のためにもならないと思います。

3号を発信した後、「ノリシロをつけて、頁をふって」とのメールをいただき、一瞬、何のことか分かりませんでした。

私自身は、書き捨て、読み捨ての性格のものだと思っていました。ですから、プリントして保存とか配布すると言われて、身構えるようになりました。自ら課した制約もあり、本来、やりたかった、ニュース+解説から、歴史+随想に変わってしまいました。書いていることは、公式な見解ではなく、私見であることを強調するために、意識的に自分を前に出したため、余計、読みにくくなったと思います。

青木一芳さん(千葉)に「国際議会」について解説していただいたように、もっと依頼原稿を増やせばよかったとも思います。原稿依頼というのは、こちらにも心の余裕がないと出来ないものです。

今、心から望んでいるのは、『区報』と『理事通信』の役割を整理して、インターネットを利用した、タイムリーで読みやすい、報道、解説、教育、交流促進のための、新しい区の公式メディアとそれを実現する制作体制づくりです。

個人的には、今後、まったくプライベートなもので、イベントのルポとか、話題のワイズメンのインタビューとかで楽しもうかと思っています。そのために、『素浪人ず・ビュー』なる商標も登録しておきます。今は、クラブのブリテンエディターなどに身をやつしている在郷ワイズメンにご協力いただければとも思います。

1年間、お読みいただいたことを重ねて感謝いたします。また、多くの方に取材協力、応援をいただきました。それもほとんどが、今すぐに教えてくれという依頼にもかかわらずでした。

1年間、監修をしてくださった区書記・ITアドバイザーの田中博之さん(東京)と、文献委員長の村杉克己さん(東京北)には、本当に監修以上のこともやっていただきました。このまさに未曾有という1年、それぞれ多忙の中を、経験と見識をもって、見ていただきました。それも短時間に。よくぞ、このお二人にお願いしたものだ、自分を褒めたい気持ちでもあります。

本当にありがとうございました。